

機能語ホドの用法と解釈
—数量表現をとるホドを中心に—

言語学・応用言語学研究室 4年 1LT14158S 吉武柚里

1. 問題提起

奥津（1986）は、ホドの用法を次の表の左欄のように分類しているのに対して、本論文では右欄のような分類を提案した。

奥津（1986）における分類	例文	本論文における分類
概数を表す形式名詞	10cm ホドの魚	概数化
	こぶしホドの大きさの石	値化
非常の程度	死ぬホド疲れた。	程度
通常 of 程度	死なないホドに練習しろ。	
同程度	日本はアメリカホド大きくない。 ロシアホド大きい国はない。	同程度
比例	食べれば食べるホド太る。 金持ちホドケチだ。	比例
(該当分類なし)	田中さんホドの人材であればすぐに昇進するだろう。	高評価

ここで注目したいのは、奥津（1986）の「概数を表す形式名詞」という分類の部分で、奥津（1986）にとっては、(1)のホドの前要素は全て数量詞あるいは数量名詞に相当する表現ということになっている。

- (1) a. その魚の体長は[10cm]ホドである。
 b. [こぶし]ホドの大きさの石がある。
 c. シンクは[水切りかごを設置できる]ホドの幅である。

(2) 問題：

名詞句や文が「間接的な数量表示」「数量名詞に相当する表現」として扱われることは妥当なのだろうか。

本論文では、この問いを中心に考察を行った。

2. 本論文の主張

以下の(3)(4)を見てほしい。

- (3) a. ok 10cm ホドの体長の魚
 b. ok 10cm の体長の魚
 c. ok 10cm の魚
 d. ok 体長 10cm の魚
- (4) a. ok こぶしホドの大きさの石
 b. ?? こぶしの大きさの石
 c. * こぶしの石
 d. * 大きさこぶしの石

以下の(3)(4)を見てほしい。

(3)は「10cm」が数量表現として機能しているため、以下の(3)(4)を見てほしい。

(3b)～ 以下の(3)(4)を見てほしい。

(3d)のようにホドを削除しても容認される表現となる。同様に、(4)において「こぶし」が数量表現として機能しているのであれば、ホドを削除した(4b)～(4d)も自然な表現になるはずである。しかし、(4b)～(4d)容認度が低い表現となっている。このことから、(4a)ではホドがあることにより、「こぶし」という非数量表現が数量を示すものとして機能するように変化していると言える。

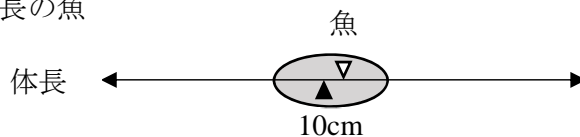
本論文では、以下の(3)(4)を見てほしい。

(3b)のような数量を「だいたい」とぼかす機能を〈概数化〉、(4a)のような非数量表現を数量表現に変化させるという機能を〈値化〉とした。以下では、ホドの前接要素を P、スケール名を A、数量・数値を示したい対象を Q とし、「P ホドの A の Q」という形式を基本形とする。

3. 〈概数化〉

〈概数化〉とは、P が示す数量を概数化するという機能である。P には、主に数量詞が現れるが、数詞単独や「半～」という名詞句、「名詞句+の+スケール名」という形式が現れることもある。

(5) a. 10cm ホドの体長の魚



b. 10cm クライの体長の魚

(6) a. ok 全体の四分の三ホドの賛成票を得た。

b. ok 半日ホドの休みを使い、買い物に出かけた。

c. *この改正案は、大部分ホドの反対意見を押し切り採用された。

(7) こぶしの大きさホドの石

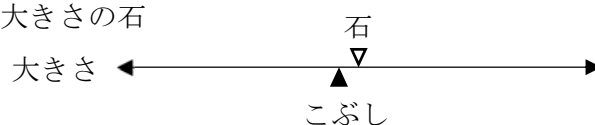


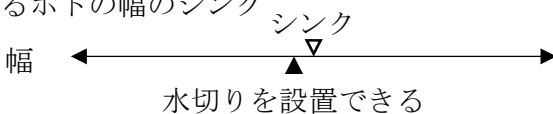
4. 〈値化〉

4.1. 〈値化〉

〈値化〉とは、単独では非数量表現である名詞句や文を、数量表現として機能するように変化させるものである。ホドがつくことによって名詞句や文はあるスケール上での値を示すようになる。

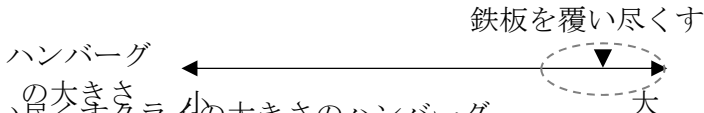
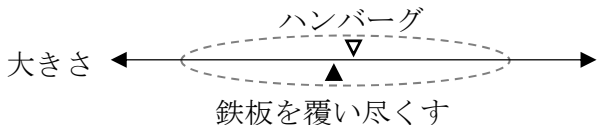
(8) a. こぶしホドの大きさの石



- b. こぶしクライの大きさの石
- (9) a. 水切りを設置できるホドの幅のシンク
- 
- b. 水切りを設置できるクライの幅のシンク

4.2. 注意すべき表現

〈値化〉のホドの基本形と同じ形式であっても異なる用法である場合がある。(10)がその例である。〈値化〉のホドはクライと置き換えが可能であるのに対し、(10a)のホドはクライと置き換えると意味に違いが生じる。(10a)は、ハンバーグの持つ「大きさ」という属性の程度を示している。本論文では、このホドを〈程度〉とした。

- (10) a. 鉄板を覆い尽くすホドの大きさのハンバーグ
- 
- b. 鉄板を覆い尽くすクライの大きさのハンバーグ
- 

5. おわりに

本論文では、奥津（1986）において「概数を表す形式名詞」としてまとめられているホドは〈概数化〉と〈値化〉の2つの機能に分けられると主張した。〈概数化〉のホドは、主に数量表現が示す数量をぼかすという機能であるのに対し、〈値化〉のホドは非数量表現である名詞や文を数量表現と同等のものに変化させるという機能である。

(1b)や(1c)においてホドの前要素である「こぶし」「水切りかごを設置できる」はホドの機能によって数量を示すものに変化しているのであって、前要素が数量表現であるわけではない。したがって、名詞句や文が「間接的な数量表示」「数量名詞に相当する表現」として扱われることは妥当ではないと結論付ける。

6. 参考文献

奥津敬一郎（1986）「形式副詞」『いわゆる日本語助詞の研究』